

資料紹介

『宇佐詣記』

山口敏幸・豊島幸子・寶龜道聰

一 奥嶋景就と旅

本書の著者平戸藩士奥嶋景就かげなりの自筆の詳細な履歴書「譜草」を見ると、自身の誕生から家内の重要事、褒賞、終生修行を続けた諸芸の記録のほかに、旅に関する記録も相当に残されている。公務の旅を挙げてみると、十三回に及ぶ参勤・下国随伴の旅。長崎警備に於いて、福岡藩・佐賀藩を補助する役目の平戸藩主の長崎出張随伴。そのほか狩の供。領内巡視の供。鯨捕り見物のため、生月島での益富又左衛門宅滞りなど珍しいものもある。この公務の旅は、彼の生涯の旅の中では、時間的にも移動距離の上からも大きな比重を占めることは間違いないだろう。

私的な旅としては、享和二年（一八〇二）景就二十五歳の熊本行、文政二年（一八一九）四十二歳の宇佐行の比較的長期の旅の他に、公務の途次に宇治・下関・金比羅山・甲州景林寺・江州多賀大社・石山寺等々訪れている。借財取片付け役、勘定奉行として勤めた三度の大坂詰の折は、大いに旅を楽しんでいる。勤めの暇や京への使者へ発つたついで等、あらゆる機会を利用して、短期の旅に出かけている。京の内外ほとんどあらゆる所、比叡山・丹波亀山等々。又、許可を得て大和・紀州・泉州の名所旧跡寺社を八日間かけて四十余箇所を経巡っている。だが、なぜか江戸在府の折の旅の記事が全く見当たらない。大坂における彼の行動を見ると、江戸在府中どこにも出かける意志を持たなかったとは思えない。在府中は外出にも制限が有る様なので、

一切の旅は許されなかったのであるうか、検証を要する。

景就は公務としての旅に数々出かけたが、それに関する紀行は残していない。もともと参勤交代における彼の役目上、多忙過ぎて書く暇も無く気持ちの余裕も無かった事は想像できる。しかし、私的な旅においては、紀行を二つ書き残している。

一つは二十五歳の時、熊本での剣・鎧の修行を目指して、友人四人と共に出かけた旅の記録「南遊記行」である。熊本藩士との交流の様子を生き生きと挿絵入りで描き出している。多くの社寺名所旧跡を訪ね、埋め立てられ今は無い八代の島々、西南の役で焼失し其の場所を移した、熊本の藤崎神社の在りし日の姿も描き残している。熊本を発ち久留米・太宰府天満宮・箱崎・福岡を経て平戸へ帰った。この紀行は全七十七丁其のうち二十七の挿絵が入れられている力作である。この紀行の執筆姿勢としては、基本的には風雅の体裁をめざしている構成のように思われる。歌枕に歌われている土地等では、様々な歌集から関連する和歌を列挙し、名所旧跡においては、古典や史書からの引用を様々挙げている。又、序文の代わりにしたのもあるうか、冒頭には友人たちの饒の漢詩を並べている。雅文の構成を採りながらも地の文は俗文で書かれている。若気のいたりか、ざれ歌めいたものを盛り込むなど、雅を目指しながらもやや脱線している。

今回翻刻にあたった、もう一つの紀行「宇佐詣記」は、前回の紀行を書いてから十七年を経過し、様々な人生経験を積んだ景就四十二歳。六回に及ぶ連年の参勤・下国の供の後の、二年ばかりの国許勤務の間に行った旅の記録である。

『奥嶋六郎太夫 兼而腰痛二付段々 療養有之候得共一円 全快無之二付筑前 武蔵江相越入湯仕度 依之当時御暇願之通 被仰付候』

(目録番号8619) この許可書を貰い、宇佐宮を目指しての従僕と二人旅である。文政二年九月十一日平戸を出立、佐々・佐世保を経て早岐庄屋宅に到着。ここではゆつくりと逗留して、寺での芝居見物、三川内の窯場訪問などで時を過ごしている。武雄・佐賀・久留米を通りすぎ、高良山へ登る。「寺は大なれども淋しき所なり」と言う善導寺から、豊後へ入って日田を過ぎ、一ツ戸村の穴道を「珍しきもの」と感じ、次に羅漢寺へ参詣「聞き及びしよりも奇なる所なり」と言う。四日市に宿り「此度宇佐参詣ころざして出しゆへ、髪結い湯あみしで出ぬ」と心境を述べている。宇佐宮・大貞八幡の経済的な状況、大宮司家の由緒や、勅使接待のもの入りで、借金に今もって苦しんでいる事等も、聞き込んだりもしている。求菩提山・彦山に登り、秋月を経て、武蔵の湯町に出る。この温泉での療養を願って遙々やって来たにも関わらず、あまり気に入らなかったと見えて、「ぬるくて武雄の方を思う」など不平を並べている所がおかしいし、湯町の温泉が川底に箱を埋めて設置されている様など興味深い。湯町の全体の様子が挿絵によってより分かり易くなっている。大宰府政庁跡については、三枚もの図を描いている。観世音寺戒壇院・政庁跡の全体の位置関係を示す図、これは奥村玉蘭著『筑前名所図会』「西都図三」とほぼ同じ構図で描かれている。礎石の並び具合と数、その形態など、旅先での短い時間の中で、正確さを期して描いた様子が窺える。再び太宰府天満宮を参詣し、福岡を経て唐津へ向かい、武雄に到着。武雄では往路と同じ鉄炮屋という宿に四五日も逗留、温泉を満喫している。温泉に浸りながら様々な人々の人間模様を観察、色々と感想をのべている。「過ぎし日宇佐の宮詣せる事共、思いやるに境地景勝なお目に有るが如し。ゆえに拙き筆ながらその神宮境内のあらましを写して、後の日の思い

出にと一枚の図にせしなり」と記していて、彼の紀行執筆の動機を窺わせる。また、他書に「その好む所に僻す」と自ら述べるように、彼の旅への強い志向をも見ることが出来る。武雄より黒髪山、早岐、田平を経て平戸に帰る。

「宇佐詣記」は「南遊記行」に比べて、気負いが無くより力が抜けていて平明である。また、心境の吐露よりも、彼の体験をありのままに記している。雅文をいろどる和歌・詩・俳句なども一切掲載せず俗に徹している。挿絵も少なく丁数も半分未満に満たない。序文・奥書き・内題も無く一丁目より本文に入る。彼の蔵書の中に、「天祥公御道中記」(目録番号212・平戸藩主松浦鎮信の雅文の参勤紀行)と題された写本がある。奥書きによれば、「文化十三年之冬之を写す」と記されていて、他の人々の紀行にも興味を示した様子が見える、特に旅へ強く関心を持っていた景就が、広く刊行されていた紀行類を目にする可能性は相当に高かったのではないかと思う。大田南畝や本居宣長が自分の旅の友としたように、益軒の紀行を見ることが有ったかも知れない。彼はその晩年に至るまで、剣・鎧等の武術・兵学・衣紋などの諸芸の修行を続けていた。そしてまた、無類の旅好きでもあった。文政年間後半になると、人生の残りの時間から追いついてられるが如く、まるで何かに憑かれた様に旅に出かけ、旅の中で人生を終えた。

※文中(目録番号)は奥鳥家文書目録番号

(山口 敏幸)

二 奥嶋景就と奥鳥家

平戸松浦家中、百五十石の扶持を食む奥嶋家は、初代を与次右衛門正盛といひ生国は仙台である。松浦鎮信⁽¹⁾に仕官し、大小性格三百石の

家禄と平戸高麗町に屋敷を与えられた。のち事情あつて百五十石を辞退するが、代々有能であり側近として重用された。八代奥嶋盛仁の時明治を迎え、僧籍に入つて佐世保市中里町にある古刹、真言宗岩間山東漸寺の住職を務めた。この時、家に残されていた文書類を長持ちにいられて持参し、それが現在まで良好に保管されていたものである。現住職、奥島正就氏は与次右衛門から数えて十代に当たる。この文書類は殿様に関係するもので大切にするようにとの伝承はあつたものの、具体的な内容についての把握はなかつた。ことに重要な女筆の書簡に關する情報はなかつたようである。前記の紀行記を残した五代、六郎太夫景就は（以下景就と記す）安永六年（一七七七）に生れ、天保元年（一八三〇）三月六日大坂藩邸で没した。享年五十三歳であつた。景就は事務能力に優れ、写本、版本、書翰類、絵図類が現在のような良好な状態で残されたのは、ほとんど彼の功績によると思われる。

どういふ事情からか詳しい先祖書を残し、殊に「譜草」と題した自身の経歴書は、出生から文政十二年（一八二九）十二月二十八日まで書かれている。翌年には死亡していることから、自分で記録したほぼ完璧な履歴と云える。

それによると藩校維新館の句読師助になつたのは数え二十三歳の時であり、三十歳までに剣や鎧の免許を伝授されている。文武共にすぐれた人物であつたことが分かる。享和四年（一八〇四）、藩主の第三子熙の近習となり、生涯近侍した。

文化二年（一八〇五）二十八歳の時初めて熙の参勤に随い江戸へ上り、以後参府七回、下国七回の御供をしている。文化八年の下国は木曾路を通り、表御駕籠脇勤め、とあり、おそらく駕籠の乗り口脇に立つことを云うのであろう。文化十一年の下国にも御駕籠脇勤め、さ

らに翌年の参府では表御駕籠脇を勤めるなど、常に側にあり信頼の厚さが窺われる。

「譜草」より景就の役職を追ってみると、文化十年に父茂助正美が隠居し家督を相続した。その後、大小姓を拜命している。文化十五年中老嫡子格になり、ほどなく御小納戸頭を拜命、奥通りを許され、熙の第一子安丸の読書師範、翌、文政二年には養育係となつている。

次第に役職も重責を帯び、文政七年勘定奉行就任と同時に大坂詰めを仰付られ、京都御所への歳暮使者、また両町奉行への新年の挨拶などに多忙を極める。たびたび平戸、江戸、大坂を行き来し、平戸にあるときは御茶道道具頭や外国船渡来の節の一番手大筒支配など、関わつた役職は実に雑多で文武両道にわたる。

文政九年（一八二六）二月、急ぎ出府せよとの飛脚便が到来、二月廿二日伏見より乗船し三月六日江戸着、御隠居静山より直々の「借財御取片づけ」の命令であつた。

一と月ほどで「借財取片づけおおかた御趣向通りに相済」と記されているところから、經理の能力も高かつたことが分かる。鯛や昆布、他に五百疋の御祝儀を戴き、五月には江戸を出立、あちこち参詣し六月に大坂に入った。八月、かねて願ひ出していた奈良参詣が許され、奈良、高野山、吉野を巡る八日間の旅に出た。五十歳、なお健脚である。

大変絵も巧みであり、多くの模写が残されている。殊に上杉謙信に関心が深く、春日山城の縄張り図や布陣図、謙信の肖像画など、違ふ図像が複数存在し、どこの家中に於いて模写、という書入れがあるところから、参勤に同行した府の折りに写し取つたものであろう。この絵図類も、詳しい解析により新たな発見が期待されるものである

肖像画の中には、未完成ながら父茂助が描かれている。四代茂助正

美（宝暦元年（文化十一年）は寛政九年（一七九七）長崎聞役を拜命した。景就も同行し一と月ほど長崎に遊んでいる。長崎聞役については、まだ発表された研究も少なく茂助の就任の記録は新たな史料となるだろう。残念ながら就任期間や活動の記録はなく、関連文書の発見が待たれる。

「譜草」には家族に関する事項はきわめて少ないが、三十四歳で結婚、最初の妻を病弱により離縁し、再婚した妻との間に三男一女をもうけた。二男少二郎を抱瘡のため六歳で失うが、長男陸太郎の元服を文政十一年に見届けている。十二年再び大坂詰めになり、まえに書いたように、翌年大坂にて死去した。三男海三郎は吉村家へ養子に行き初代尾州志摩城主の宮田流武芸指南を勤めた。一女は平戸の野元萩之助へ嫁ぎ、この野元家も父は長崎聞役を勤めた野元弁左衛門である。山本博文著「長崎聞役日記」はこの弁左衛門の日記を史料とした、と書かれている。（豊島 幸子）

三 奥嶋家文書について

奥嶋家文書は佐世保市中里町、真言宗古刹東漸寺の住職を勤められている奥嶋家に伝えられてきた。

奥嶋家は藩政時代、平戸藩家中百五十石の中堅藩士で、大小姓・中老嫡子格の家柄であった。藩主の側近く仕え、平戸藩政史にとっても初出の大切な古文書が残されている。

「先祖覚え書き」によれば、初代奥嶋与次衛門正盛は仙台松平陸奥守家臣楯帯刀の三男で、浪人して江戸にある時、平戸四代藩主鎮信（天祥）に馬術師範として召し抱えられた。嗣子五代藩主になる棟（雄香）の馬術師範も勤めた。その後、次の三名はとくに藩主の側近として仕

え、文書も残した。

三代与左衛門方正は八代藩主に仕え、その内室久昌院（宮川トメ）の信頼を得て相談相手となり、私信の書簡を百通以上残した。

四代茂助正美は九代藩主清（静山）の近習を勤めた。松浦家世伝編纂のため輯肥翁が設けられると、その要員の一人に選ばれ、藩校維新館の監学を勤め、長崎聞役の要職に任じられた。また静山の長子太郎吉（章）の世話係を務め、関連する静山の書簡も残されている。

五代六郎太夫景就（正就）は十代藩主熙（観中）に仕え、多岐にわたる才能を発揮した。若い時から武術の修行に励み、関連する要門の写本を作成し、謙信流兵法を研究した。また描画の才能に優れ、謙信等の肖像画や春日山城の絵図の模写等を多く残している。

先祖覚え書きも六郎太夫により整理され、職務に必要な文書も丹念に写し取られ、その記録が残されている。この奥嶋家文書が残されたのも、六郎太夫景就に負うところが大きい。

奥嶋家文書の内訳は精査したものではないが、次の通りである。

写本・版本	一三八点
絵図	七二点
巻物（免許皆伝など）	一四点
書簡類（断簡を含む）	一五六点
文書類（残欠を含む）	四六六
写真	二点
計	四二八

明治・大正時代の文書は十二点ほどで、殆どの文書が前述の通り奥嶋家三・四・五代の時期に残されている。とくに写本・絵図は五代六郎太夫の筆による。

奥嶋家文書の中で最も驚かされたのは、三代与左衛門方正宛の百通を超す女筆『とめ』文書の存在であった。女筆文書の解説は慣れない上、親しい私信として書かれて、月日と『とめ』の名前があるだけの書簡は内容の把握は困難であった。

やがて解説が進むうち、平戸九代藩主松浦清（静山）の誕生から幼少時代を語る書簡が含まれていることが分かった。松浦静山は有名な甲子夜話の著者である。

『とめ』は八代藩主誠信（安靖）の側室『宮川とめ』で、後に誠信の内室久昌院となる。静山にとって実の祖母であり、育ての親の役割を果たした人である。



女筆『とめ』文書

与左衛門方正は誠信の近習お勤め、江戸参府十四回、奥通り、お手回り支配、小納戸役、お使い番、御私領御用と藩主の側近を務めている。江戸上屋敷の奥を仕切るとめにも頼られる関係にあり、顔を合わせることもあったと思われる。『とめ』書簡には与左衛門による返書の日時が記入されているが、返書は残されていない。

とめ文書の内容で最も多いのは、「けしからぬ差し支え」ととめが

嘆いた国用不足（財政不足）による江戸屋敷の生活費不足であった。また姫様方の衣装や婚礼準備金の手当不足について度々訴えている。

静山は晩年、少年時代は「身卑しかりしかば」と回顧している。それは宝暦十年（一七六〇）一月二十日、江戸上屋敷で静山を産み落とした女性は「とも」というただの女中に過ぎなかったからである。静山は松浦の姓も使えず、山代英三郎殿と「様」付けで呼ばれることもなかった。

『とめ』書簡は名付けも『とめ』に任せられ、生まれた直後『とめ』の元に引き取られたと語っている。そんな中、静山はすくすくと成長する。『とめ』は眼を細めてその様子を「英三郎様さえざえしくご成長遊ばし」と度々与左衛門に書き送っている。

書簡で年号の確定できる最初のもものは、宝暦七年誠信の長子本覚院御大病に関する内容のものである。現在把握できる最後の手紙は、明和七年（一七七〇）一月仙洞御所お手伝い普請の命令に対する驚きと困惑の書簡である。

とめを支え続けた与左衛門は、次の年に生涯を閉じた。

（寶亀 道聰）

註

- (1) 松浦家四代天祥鎮信（一六二二～一六八九）茶道鎮信流の開祖である。「奥嶋家文書」にはこの天祥公に関するものが多く残されている。
- (2) 現在では奥嶋ではなく奥島とされている。
- (3) 松浦家十代熙、九代清の第三子（二七九一～一八六七）第一子廢嫡のあと第二子が早世したため嫡子となった。
- (4) 松浦家九代清、隠居して静山と号す、「甲子夜話」で知られる。
- (5) 山本博文著『長崎開港日記』幕末の情報戦争』ちくま新書、一九九二年。
- (6) 奥嶋家系図による。九代奥嶋正美氏作製。